

【JICA エッセイコンテストを活用した教育実践】

東宇治高校と国際理解教育

京都府立東宇治高校地歴公民科教諭 上西 豊

はじめに

京都府立東宇治高校は宇治市北部に位置し、全日制普通科で1学年7クラス、その内英語探究コース、文理探究特進コースを1クラスずつ設置しています。進学に力を入れる一方で、クラブ活動も盛んで、文化祭、体育祭などにも熱心に取り組む、いわゆる学校らしい学校ではないかと思います。通ってくる生徒は京都府南部から京都市内までの広範囲に渡り、生徒のほとんどは進学を希望しています。

東宇治高校における国際理解教育

本校は10年以上前から、タイ・チェンマイにあるユパラート校との交流を行っており毎年ユパラート校から日本語を学んでいる高校生20数名が本校を訪れ、文化交流事業を続けています。

右の写真は毎年行う歓迎交流パーティーの様子で、ユパラート校の生徒がいつも学校で習っているタイの民族舞踊を披露してくれます。



また右の写真は、書道の授業を本校の生徒と一緒に受けている様子です。

3日間ほどの滞在ですが、その間本校生徒や教員、日タイ教育交流協会の方たちによって、ユパラート校の高校生のホームステイを受け入れています。私も毎年ユパラートの教員や生徒のホームステイを受け入れています。とても素直で日本好きな生徒たちばかりです。回転寿司に連れて行ったり、大津祭りを一緒に観に行ったり、日本文化の紹介に張り切ってしまう。



研修旅行も文理探究特進クラス(以前はⅡ類文理系)はユパラート校との交流をメインとした内容で取り組んできました。我々がユパラート校を訪れた時は、向こうの教員や生徒のお宅にホームステイさせて頂きました。

私も2008年に文理系(当時はⅡ類)の担任としてユパラート校を訪れました。その時ホームステイさせて頂いたのがソムサク先生で、それ以来彼が日本に来た時は私の家に泊まるなど家族ぐるみの交流が現在も続いています。

残念ながら2011年～12年はタイの政情不安から急遽行き先をマレーシアへ変更し、2014年以降は台湾に行き先を変更していますが、ユパラート校による本校訪問は現在も続いています。英語探究クラスは毎年オーストラリアへ研修旅行に行っています。

その他2012年には台湾の六和高級中学校(高校1,2年相当)、2013年には香山高級中学校、

2014年には鳳山高級中学校、2015年大明高校、2016年には鳳山、大明の2校が国際交流に本校を訪問されています。

この様に、本校では多彩な国際交流を日常的に行ってきています。

JICA エッセイコンテストの取り組み

地歴公民科の授業での取り組みの1つに JICA のエッセイコンテストへの応募があります。この取り組みも私が着任した10年前には既に始まっていました。

本校では、1年生で現代社会2単位の授業を行っています。丁度1学期の終わりに世界と日本について学ぶ単元があり、そこで世界で活躍するアムネスティや国境なき医師団などNGOの活動についても紹介し、夏休みの課題として JICA のエッセイコンテスト(本年度のテーマは「未来の地球のためにー私たち一人一人にできることー」)への応募を課しています。あくまで授業の一環ですので、1200字以上1600字以内の提出を必須としています。毎年7クラス約280名の生徒がコンテストに応募していることになります。

生徒たちは主に関連する本を読んで書く子がほとんどです。書くテーマは、発展途上国への日本の支援のあり方についてや、自分たちの生活を見直し、エコな暮らし方について考える、というものが多く見られます。その中でも、私が担当したクラスで印象深かったのは、発展途上国出身の生徒が、自分の国の貧困問題を取り上げて書いたものでした。子どもたちが、ゴミの山から使えそうなものを探しては売りさばき生活の糧にしている実態を豊かで物にあふれた中で暮らす日本の子どもたちと比較して書いていました。またもう一人やはりアジアの発展途上国出身の生徒は、幼い時に自ら体験した出来事について綴りました。その内容は、市場に行くと必ず物乞いをする子どもに出会うこと、その度に自分がいかに恵まれているかを感じる、また日本と違って水道の水はとでも飲めるものではなく、沸騰させて冷ましたものを飲んでしたこと、突然停電が起こりそれが何時間も続く事もしばしばであったことなどでした。

また児童労働や少年兵について取り上げる生徒も多く、特に少年兵については多くの生徒が子どもをさらってきて従順な兵士に仕立て上げていく実態にショックを受けています。

JICA 主催のワークショップへの参加

世界が抱える問題について知ったあと、それをどう解決していけるのか、自分はどう関わられるのかについて深める場を JICA が提供してくれています。

2013年12月22日～23日 JICA 関西で行われた国際協力について考える高校生対象のワークショップに2年生の生徒3人と参加しました。ちょうど自分の進路について具体的に考えだす時でもあり、参加した生徒はみな国際関係等について学びたいという希望を持った生徒たちでした。ワークショップではカンボジアで洋服を作る事業を展開されている方のお話をお聞きし



た後、現地とフェースタイムでつなぎそこに働く女性たちの声を生でお聞きすることができました。

また貿易ゲームを参加者全員で行い、発展途上国が抱える問題点と、その発展を阻む要因について疑似体験をすることで更に国際関係についての理解を深めることができました。

左の写真は開発教育のワークショップの一つで、いろいろな物の関係を糸で表すゲームの様子です。

そして最後のワークショップは参加者が学校の枠を超えてチームを編成し、国際貢献の独自プログラムを考えて発表するというものでした。具体的な発展途上国を想定して、その国の産業の活性化を図ることを考えたり、物流のあり方や通信インフラを整備する事業の展開を考えるなど、多岐にわたる自由な発想がたくさん見られました。

例えば、その国の特産品を日本に輸入することで産業の活性化を図ろうと考えた時、ネットを使ってその商品化に協力してもらえそうな企業を探していくなど、どの発表も具体的にプロジェクトを構想したものでした。その様なチーム内でのディスカッションを通じて、発展途上国が抱える具体的な課題や発展の可能性を理解していくという過程を生徒たちは体験しました。

教員チームも本気で参加し、私達のチームはガーナのカカオ農園での児童労働をなくすために、フェアトレードのチョコレートを日本で製造販売するというプロジェクトを寸劇という形で発表しました。右の写真はその発表風景です。



1泊2日の短い期間ではありましたが、他校の生徒と寝食をともにし、いくつものワークショップに参加したり、大いに議論して1つのプロジェクトを作成するという体験は生徒にとって大変大きな刺激となりました。

また、仮想のプロジェクトとはいえ、実際に具体的な国際貢献のあり方を構想することで、それまで遠い存在でしかなかった発展途上国に対する国際貢献をより身近な課題として捉えるきっかけになったと感じています。

私達教員も他校での国際理解教育の実践例をお聞きしたり、同じような悩みや苦勞を共有することができ、とても勇気づけられ、元気をもらえる2日間でした。

国際理解教育を通じて成長する生徒たち

最後に、この様な国際理解教育が生徒たちの成長や生き方にどのような影響を与えるのかについて考えてみたいと思います。

JICA 主催の1泊セミナーに参加した生徒3人の内2人はその後国際関係の学部に進学し、現在も学びを続けています。

次に私が本校で最初に3年間担任し、一緒にタイ・ユパラート校に研修旅行に行った生徒たちについて、見ていきたいと思います。

彼らは上の表に掲げるように1年生の10月から2年生の2月まで1年半に及ぶ国際理解教育のセミナーを

平成 19 年	
10 月 5 日	第Ⅱ類文理系・英語系セミナー開校式
10 月	第1回タイ文化理解タイ語教室
11 月 2 日	同志社大学「国際理解」講演会・キャンパス見学
12 月 5 日	北タイ高校生による文化紹介と交流
平成 20 年	
1 月	第2回タイ文化理解タイ語教室
2 月 2 日	着物着付け体験
2 月 8 日	インターネットを利用したタイとの交換授業
2 月 16 日	Nict 情報通信研究機構の見学
4 月	ユパラート校生との交流
5 月	第3回タイ文化理解タイ語教室
6 月 20 日	大谷大学教授 高井康弘氏講義 「北部タイの人々・暮らし・文化」
7 月 11 日	大谷大学助教授 古谷伸子氏講義 「北部タイの人々・暮らし・文化2」
8 月 1 日～7 日	チェンマイ研修旅行
平成 21 年	
1 月 15 日	北タイ高校生による文化紹介と交流
2 月 12 日	JICA 見学・研修員との交流

受講し、その一環として2年生の夏休みにホームステイを伴う研修旅行としてタイ・チェンマイを訪れています。そして、その最後にセミナーのまとめとして右の写真のような文集を作成しました。

その文集の中で彼らは自分たちにとってこのセミナーがどのようなものであったかを率直に語っています。クラスのリーダー的存在であったA君は「僕のタイへの最初の印象、それは正直『行っても面白くなさそうだし、なんとなく危なそう』こんな勝手なイメージを持っていました。…中略…(セミナーでのタイ人との)交流では、楽しかった反面、言葉や生活習慣の違いを改めて知り、不安はさらに大きくなりました。」と書いています。彼に限らず、みな大なり小なり初めはタイへの不安について書いています。そして、実際にチェンマイに降り立ちます。その時の興奮についてT君

はこう書いています。「チェンマイに到着し、夜にも関わらずユパラート校の皆が温かく迎えてくれて、とても嬉しい気持ちでいっぱいでした。…中略…ユパラート校での交流は、自分の中でタイ研修の思い出の核となるくらい印象的でした。目が合ったら微笑んでくれるし、優しさで満ちた居心地の良い空間でした。友達もどんどん増えていくにつれて、日本に帰るのが嫌で嫌で仕方ありませんでした。言葉の壁は高くても、言葉を越えた所で通じ合えることを実感できたことは、これから先への自信にもつながったと思います。」実際彼らはたった数日でみるみる親密になり、最後に空港で別れる際にはみんなが泣きじゃくっている光景に私も目を見張りました。ここに上から目線ではない、対等で真に友好的な関係を見ることが出来ます。

更に、そこから一步踏み込んで、タイの抱える課題と自分に出来ることに考えが及んでいたのがNさんでした。チェンマイでの感想は「タイの人たちの笑顔が、暖かさが好き。時間に追われないような雰囲気が好き。空は大きく、道は広いそんな風景が好き。チェンマイ研修旅行を終えたばかりの私はただ単純に感動していました。…中略…タイでホストと過ごした朝のことで、私はこの時初めて『貧しい人』を本当に知りました。その朝、屋台で朝食をとって車に戻ろうとした時、道におばあさんが座り込んで何か小さなお皿を手にしていました。そこには小銭が乗っていました。そして私たちが通るとお皿をこっちに向けてきたのです。私はドキッとしました。一瞬凍りついたようにそのおばあさんを見てしまいました。日本にだってお金に困っている人はいます。でも違う。ちょうど私が見てきた写真やテレビで見た『貧しい人』の訴えるような眼。正直、怖くて忘れられません。…中略…知ってしまった世界の現実。私は何かせずにはいられないと強く思いました。恵まれた世界に生まれてきた以上、私は困っている国の何か役に立たないといけなと思ったのです。そんなに大きいことはできないかもしれないけど、ほんの少しでも役に立てることを考えていました。」彼女はその後国際関係を学ぶ大学に進学し、タイの山岳少数民族の調査を主な研究分野とし、現在も大学院生としてその研究を続けています。去年の夏チェンマイで会った時、颯爽とバイクを乗りこなしていた姿が印象的でした。

彼女のような例はまれではありますが、一人でもそのような人材が育ってくれたことを誇りに思っています。

